

《研究ノート》

不審者からの攻撃に対する女子青年の抵抗方略に関する予備的検討*

A Preliminary Study on the Resistance Strategies of Female Adolescents against Assault by Confrontational Offender

永井靖人**

NAGAI Yasuhito

Abstract

The purpose of the present study was to clarify the strategies of female adolescents to resist an assault by confrontational offender. Participants were 88 female university students, and were asked to describe how they could respond when attacked on the street. Verbal data collected from the students were analyzed by using text-mining procedures. The main results were as follows: (a) hierarchical cluster analysis and cross tabulation indicated that their strategies could be categorized into 4 distinct types: “taking flight”, “fighting back physically”, “anger expression”, and “calling for help”, (b) many female adolescents who support one strategy about resistance are negative about other strategies.

問題・目的

「不審者に注意」の警告を見たことがない人はいないだろう。ライフスタイル、ビジネススタイルの多様化に伴い、路上で女性を狙った犯罪も、性犯罪にとどまらず、ひったくり、ストーカーなど、様相は絶えず変化している。そして、女性は犯罪被害を回避すべく、音楽を聴きながら歩かないようにする、携帯電話を手にとって歩くなど、時代に応じた対処行動をとっている (e.g., Honda & Yamanoha¹⁾; 永井²⁾)。しかし、自分が路上で犯罪に巻き込まれそうになった場合、どのように対処するつもりなのだろう。言い換えれば、どのような方略 (strategy) の「構え (set: 認知や反応の方向性、決定傾向)」を有しているのだろう。

不審者への対処に関して、清永・楊・田中³⁾は小学生を対象に調査を行っている。子どもたちが事件に遭遇したときにとった行動を尋ねたところ、1340名のうち、「走って逃げた」は42.5%、「キッパリ断った」9.7%、「お店やお家かけこんだ」6.9%、「子ども110番の家かけこんだ」1.4%、「近くにいた人に助けを求めた」4.6%、「大きな声で叫んだ」2.5%、「ブザーをならした」1.5%、「その他」29.3%と、8割の児童は何らかの対処行動をとっていた。しかし、「何もできなかった」児童は21.6% (以上、複数回答) にも及んだことから、危機に立ち向かうための「安全基礎体力」の形成が必要であり、何もできないと、不審者に次の加害行動を促すことになりかねないとしている。

性的暴行における抵抗と既遂・未遂との関係について、田口・池田・桐生・平⁴⁾は有罪が確定した性暴力犯192名の犯行記録を分析した小宮山・松本・土井・齋藤⁵⁾をレビューしている。被害

* 2011年9月15日受理

** 名古屋学芸大学短期大学部

者が加害者と面識がある場合は、抵抗、逃走動作、救助要請が未遂率を上げていたが、面識のない者に急襲された場合、抵抗や逃走動作に効果はなく、救助要請が未遂率を上げていたことを紹介している。Bartol & Bartol⁶⁾ は、Ullman & Knight⁷⁾ をレビューして、戦う、叫ぶ、逃げる、突き飛ばすといった強力な抵抗が有効であること、Rosenbaum, Lurigio, & Davis⁸⁾ からは、「強力な身体的抵抗 (forceful physical resistance: 殴る、蹴る、つめを使う、噛む、武器による抵抗)」、「強力でない身体的抵抗 (nonforceful physical resistance: 逃げる、突き飛ばす)」、「強力な言葉による抵抗 (forceful verbal resistance: 助けを求め、叫ぶ、加害者を脅かす言葉など)」は有効であるが、懇願する、泣く、諭すといった「強力でない言葉による抵抗 (nonforceful verbal resistance)」は効果的でないことを紹介している。性的暴行を回避できても、身体的被害を受けてしまう場合もあるが、まずは抵抗することが効果的であるとしている。

外敵からの攻撃に対する抵抗、反撃、逃走に関して、Cannon⁹⁾ の「闘争・逃走反応 (fight or flight response)」では、自分では克服できないと判断したときには逃避、回避、そうでなければ闘争、反撃行動が生起するとされている。しかし、人間の場合、路上で犯罪企図者に急襲された場合でも、相手の容貌、体格、攻撃の強弱、目的によって、異なる抵抗方略が選択されるのだろうか。

以上、街頭犯罪、性犯罪に対する抵抗方略に関する先行研究を概観したが、近年の本邦において青年・成人女性を対象とした研究は少ない。やはり、常に実態を把握した上で、必要があれば抵抗方略の「構え」を修正できるよう情報を提供し、自己評価を可能にしていくことは、防犯教育の上でも有意義なことである。なぜなら、緊急時には自らが持つ「構え」に合わない認知、反応は生起しにくいからである。しかし、現在のところ、街頭犯罪への抵抗方略および効力感を包括的に測る尺度は存在しない。そこで、本研究では、尺度開発のための項目収集、抵抗方略および効力感を規定する要因の解明を見据え、不審者による街頭犯罪に対する抵抗方略の「構え」を女子学生の自由記述から抽出、分類を試みる。そして、抵抗方略間の関連、傾向、問題点の把握を主要な目的とする。

方 法

1. 調査方法

対象者は愛知県内の A 女子大学生89名で、実施時期は2011年 7 月。

不審者からの攻撃に対する抵抗方略について、「自分の体またはバッグが不審者に触れられた瞬間、あなたにはどのようなことができるでしょうか。思いつくままに書いてください」と自由記述形式で回答するよう求めた。

2. データの分析方法

自由記述データの解析において、形態素の抽出、クラスター分析には、樋口¹⁰⁾ の KH Coder 2.beta.20 を用い、形態素間のクロス集計には、松村・三浦¹¹⁾ の TinyTextMiner v0.65 を用いた。

結果と考察

1. 記述された抵抗方略の基本統計量

回答に不備のあった 1 名を除く 88 名の自由記述について、基本統計量を Table 1 に示す。方略数の度数分布を Figure 1 (縦軸: 人数, 横軸: 個数) に、方略 1 つあたりの文字数 (原文) の度数分布を Figure 2 (縦軸: 人数, 横軸: 字数) に示す。以上から、本研究では 1 人につき約 9 字からなる抵抗方略を示す記述を 2 個ずつ程度採取したことになる。

Table 1 抵抗方略の基本統計量 (N=88)

	平均値	(SD)	中央値	範囲
方略数	2.3	1.00	2	1-6
文字数	9.0	5.37	7.2	2-27

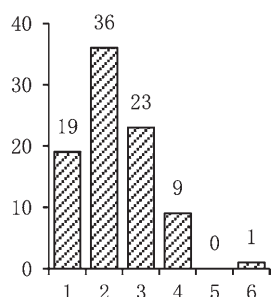


Figure 1 方略数の度数分布

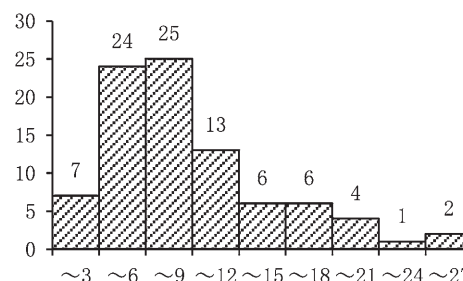


Figure 2 文字数（原文）の度数分布

2. 形態素の出現頻度

抽出語リストを確認した後、誤字、脱字の修正、漢字で表記可能なひらがな記述の変換、類義語の置換 (Table 2) などのリファインを経て、再び形態素を抽出したところ、139ケース (208語) が得られた。形態素の品詞を名詞、サ変名詞 (サ変動詞「する」に接続可能な名詞)、動詞に設定して、閾値 (最低出現件数) を3としたところ、26の形態素が分析に使用されることになった。Table 3 に形態素の出現件数、形態素間の共起度数および Jaccard 係数を示す。算出においては、松村・三浦¹²⁾ を参考に次の式を用いた。

$$J(X; Y) = \frac{|X \cap Y|}{|X| + |Y|}$$

抽出された主な形態素を見ると、「逃げる」「走る」の出現件数が45件、16件と圧倒的に多い。現代の本邦における女子学生の不審者に対する抵抗方略は、「逃げる」に代表される「逃走」が最も主要な「構え」となっていることがうかがえる。この「逃げる」動作の表現であるが、先行研究では「逃走動作」の語が用いられていた。しかし、「逃走」では犯罪の行為者、企図者の行動と誤解

Table 2 置換された語

置換前	置換後	置換前	置換後	置換前	置換後
ビックリする	驚く	逃げ帰る	逃げる	立ち去る	離れる
身	体	かけこむ	逃げる	遠ざかる	離れる
身体	体	ガン見する	睨む	引き寄せる	引っぱる
言う	警告する	睨みを利かす	睨む	体当たり	ぶつかる
騒ぐ	叫ぶ	盗られないように	把持する	振りほどく	振り払う
声を出す	叫ぶ	力を入れる		払いのける	振り払う
大声を出す	叫ぶ	強く持つ	把持する	払う	振り払う
周り	周囲	離さない	把持する	保護する	守る
さがる	退く	握る	把持する	(助けを)呼ぶ	求める
連絡する	助けを求める	ダッシュ	走る	相手	不審者
粘る	抵抗する	避ける	離れる		
(家などに)入る	逃げる	遠ざかる	離れる		

Table 3 抽出された主な形態素の出現件数、形態素間の共起度数、Jaccard 係数

形態素	逃げる	バッグ	叫ぶ	振り払う	走る	警告	睨む	把持	離れる	自分	引っぱる	助け	求める	盗る	見る	触る	叩く	手	電話	顔	抵抗	振り回す	人	体	無視	周囲	蹴る
逃げる	45	0.141	0.175	0.177	0.197	0.088	0.056	0.057	0.019	0.058	0.058	0.077	0.077	0.059	0.020	-	0.020	0.020	0.061	0.041	0.041	0.042	0.021	0.021	0.042	0.021	-
バッグ	10	26	0.091	0.047	0.071	0.026	0.143	0.118	0.059	0.121	0.152	0.030	0.030	0.094	0.063	0.032	-	0.033	0.033	0.033	0.033	0.103	0.069	0.069	-	0.034	0.069
叫ぶ	11	4	18	0.086	0.118	0.067	-	-	-	-	0.04	0.080	0.080	-	-	0.043	0.087	-	0.045	0.045	-	0.048	-	0.095	0.048	-	0.05
振り払う	11	2	3	17	0.121	0.103	0.077	0.040	0.040	-	-	0.042	0.042	0.043	0.043	-	0.045	0.190	0.048	-	-	-	-	-	-	0.050	-
走る	12	3	4	4	16	0.107	-	-	-	0.043	0.043	0.087	0.087	-	-	0.048	0.048	0.050	-	0.05	-	-	0.053	0.105	0.053	-	-
警告	5	1	2	3	3	12	0.048	-	0.150	-	-	0.053	0.053	-	0.056	0.176	-	-	-	0.063	0.063	-	-	0.067	-	-	-
睨む	3	5	0	2	0	1	9	-	0.059	0.125	0.125	0.063	0.063	-	0.133	-	-	0.077	-	0.154	0.077	-	0.083	-	-	0.083	-
把持	3	4	0	1	0	0	0	8	-	0.067	-	-	-	0.143	0.071	-	0.077	-	-	-	-	0.083	-	-	-	-	0.091
離れる	1	2	0	1	0	3	1	0	8	0.067	-	-	-	-	-	0.077	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
自分	3	4	0	0	1	0	2	1	1	7	0.143	0.071	0.071	-	0.077	0.083	-	-	-	-	-	-	0.100	0.100	0.100	0.100	-
引っぱる	3	5	1	0	1	0	2	0	0	2	7	0.071	0.071	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.100	-	-	0.100	-
助け	4	1	2	1	2	1	1	0	0	1	1	7	0.500	-	0.077	0.083	-	0.091	0.091	0.091	-	-	0.200	-	-	0.200	-
求める	4	1	2	1	2	1	1	0	0	1	1	7	7	-	0.077	0.083	-	0.091	0.091	0.091	-	-	0.200	-	-	0.200	-
盗る	3	3	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	6	0.083	-	-	-	0.100	-	0.200	-	-	-	-	-	-
見る	1	2	0	1	0	1	2	1	0	1	0	1	1	1	6	0.091	-	0.100	0.100	0.200	0.100	-	0.111	-	-	-	-
触る	0	1	1	0	1	3	0	0	1	1	0	1	1	0	1	5	-	-	-	-	-	-	0.125	0.125	0.125	-	-
叩く	1	0	2	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.111	-	-	-	-	-	-	-	-	-
手	1	1	0	4	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	4	0.125	-	-	-	-	-	-	0.143	-
電話	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-
顔	2	1	1	0	1	1	2	0	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	4	-	-	-	-	-	-	-
抵抗	2	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	4	-	-	-	-	-	-
振り回す	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	-	-	-	0.167	-
人	1	2	0	0	1	0	1	0	0	1	1	2	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3	-	-	0.333	-
体	1	2	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	-	-	0.167
無視	2	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	3	-	-
周囲	1	1	0	1	1	0	1	0	0	1	1	2	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	3	-
蹴る	0	2	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	3

※ 対角線上の囲み数字は出現件数、対角線より下の数値は共起度数、上の数値は Jaccard 係数を示す。共起が 0 の場合の Jaccard 係数は - で示した。

されかねない。被害者の立場からは「脱出」の語が適切であると考え、本研究では「脱出」を用いることとした。また、本研究の対象者は、不審者からの攻撃に「ひったくり」を想定していることが「バッグ」「引っぱる」などの語からうかがわれた。教示に影響されたのかもしれないが、近年は高齢者だけでなく、青年・成人女性も被害に遭っていることがメディアを通じて認知されてきたことが影響したものと考えられる。この「ひったくり」に対しては、抵抗が奏功する場合もあるが、被害者が死亡、重傷を負う事案も発生している。警視庁¹³⁾は被害に遭った場合は、大声を上げて周囲の人に知らせ、すぐに通報するよう勧めている。

3. 抵抗方略の関連

(1) 「構え」の分類

主要な抵抗方略の「構え」を分類するために、抽出された形態素の類似性を階層的クラスター分析（Jaccard 距離、Ward 法）により検討した。Figure 3 に示したデンドログラムを距離1.2で切断すると、上位方略として解釈可能なクラスターが4つ見出された。クラスターⅠは「睨む」「無視」「警告」など、相手に怒りや拒絶の意思を示す行動が含まれていたことから、「怒り表出」と解釈した。クラスターⅡは「抵抗」「引っぱる」「蹴る」「叩く」など、身体を使った抵抗や反撃を表す行動が含まれていたことから、「身体的抵抗」と解釈した。クラスターⅢは「逃げる」の語から「脱出」、クラスターⅣは「助け」「周囲」など、救援を求める行動が含まれていたことから、「救援要請」と解釈した。

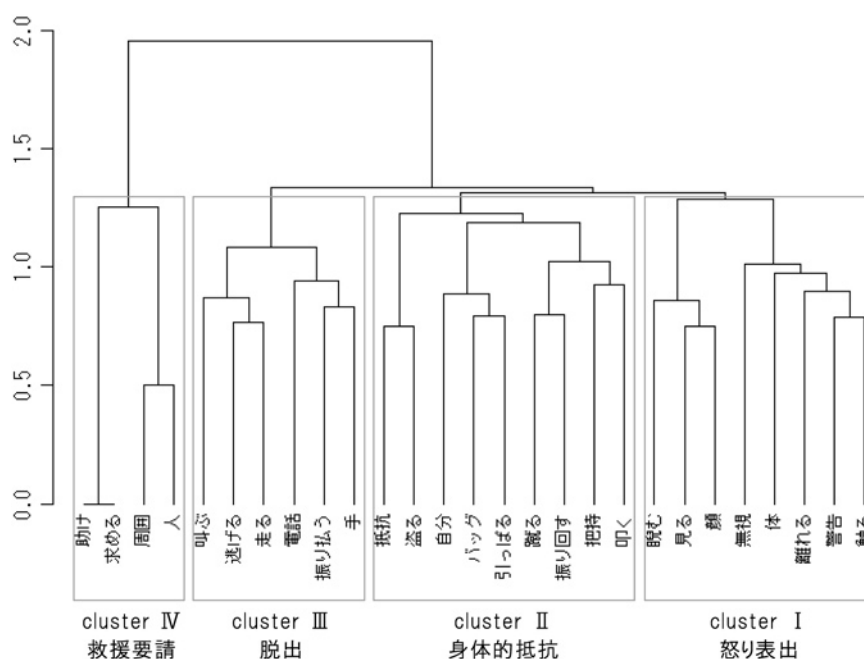


Figure 3 階層的クラスター分析による抵抗方略の「構え」の分類

Table 4 抽出された抵抗方略を「構え」として有する者の数 (N=88)

方略 (Cluster)	怒り表出 (Ⅰ)	身体的抵抗 (Ⅱ)	脱 出 (Ⅲ)	救援要請 (Ⅳ)
人数	31	35	62	14
(%)	(35%)	(40%)	(71%)	(16%)

※複数回答

次に、階層的クラスター分析で抽出された4つの上位方略を「構え」とする者について、各クラスターを構成する下位方略（動詞）が1つでも記述された場合、上位方略を用いる1人として人数をカウントした（Table 4）。なお、比率を算出する際の分母は、対象者数の合計88とした。方略による人数の偏りが有意であったので（ $\chi^2=33.380$, $df=3$, $p<0.01$ ）、Ryan法による多重比較を行ったところ、「救援要請」は「脱出」「身体的抵抗」「怒り表出」より有意に少なく（順に $p=0.000$; $p=0.004$; $p=0.017$ ）、「脱出」は他3つの方略を「構え」として有する者よりも有意に多かった（順に $p=0.000$; $p=0.008$; $p=0.002$ ）。また、「身体的抵抗」と「怒り表出」との間に有意差はなかった。上位方略においても「救援要請」は少なく、「脱出」を選択する者が多い可能性が示された。一方で、「身体的抵抗」「怒り表出」方略を有する者は、下位方略ではそれぞれ5%程度であったが、上位方略の単位では「身体的抵抗」40%、「怒り表出」は35%と対象者の4割近くに上った。

以上から、現代の本邦における女子学生の不審者に対する抵抗方略は、「怒り表出」「身体的抵抗」「脱出」「救援要請」に大別される可能性が示された。同時に「救援要請」は、先行研究で有効とされていたが、重視されていないことも示された。

（2）方略間の相関

抵抗方略間の関係を見るために、各方略を「構え」として有する者の数をクロス集計し、 χ^2 検定を行った（Table 5）。「身体的抵抗」と「脱出」との関係のみが有意で（ $\chi^2=3.942$, $df=1$, $p<0.05$, $Q=-0.482$ ）、「身体的抵抗」を想定する者は「脱出」を想定しない傾向がみられた。しかし、その他の方略どうしの組み合わせに有意な関係はみられず、2つの方略を同時に選択する者は少なかった。「身体的抵抗」と「救援要請」は88人のうち4人（5%）、「身体的抵抗」と「怒り表出」では11人（13%）、「怒り表出」と「救援要請」では5人（6%）、「脱出」と「救援要請」では9人（10%）であった。以上から、抵抗方略は「構え」として有していたどれか1つの方略が用いられ、「脱出型」「身体的抵抗型」「怒り表出型」「救援要請型」のように類型化される可能性が示された。

Table 5-1
「身体的抵抗」と「救援要請」の関連

方略 (構え)	救援要請		計
	あり	なし	
身体的抵抗	あり 4	31	35
	なし 10	43	53
計	14	74	88

n.s.

Table 5-2
「身体的抵抗」と「脱出」の関連

方略 (構え)	脱出		計
	あり	なし	
身体的抵抗	あり 20	15	35
	なし 42	11	53
計	62	26	88

$p<0.05$, $Q=-0.482$

Table 5-3
「身体的抵抗」と「怒り表出」の関連

方略 (構え)	怒り表出		計
	あり	なし	
身体的抵抗	あり 11	24	35
	なし 20	33	53
計	31	57	88

n.s.

Table 5-4
「怒り表出」と「救援要請」の関連

方略 (構え)	救援要請		計
	あり	なし	
怒り表出	あり 5	26	31
	なし 9	48	57
計	14	74	88

n.s.

Table 5-5
「怒り表出」と「脱出」の関連

方略 (構え)	脱出		計
	あり	なし	
怒り表出	あり 18	13	31
	なし 44	13	57
計	62	26	88

n.s.

Table 5-6
「脱出」と「救援要請」の関連

方略 (構え)	救援要請		計
	あり	なし	
脱出	あり 9	53	62
	なし 5	21	26
計	14	74	88

n.s.

総合的考察と今後の課題

本研究の目的は、不審者による街頭犯罪に対する抵抗方略の「構え」を女子学生の自由記述から

抽出、分類を試みると同時に、主要な抵抗方略間の関連、傾向および問題点を把握することであった。88名による自由記述の形態素解析、階層的クラスター分析および方略間の相関分析を行った結果、抵抗方略の「構え」は、「脱出型」「身体的抵抗型」「怒り表出型」「救援要請型」に類型化され、どれか1つの方略の志向が高く、残り3つの志向は低い、つまり、4種の「構え」は併存するのではなく、いずれかひとつが重みづけられる可能性が示された。

このような傾向が見られた理由として2つの要因が考えられる。まず1つ目であるが、本研究では不審者像、不審者が攻撃してくる時間帯や場所、目的を限定しなかった。不審者の攻撃目的は大きく性暴力と金品の強奪に分けられるが、不審者が自分の体や持ち物に触れられた時点で、その目的を正確に判別できるわけではないからである。しかし、このことが調査対象者に限定的な方略、または、多様な状況に対応できる共通項的な方略を想定させてしまい、その結果、回答内容の多様性が失われた可能性はある。もう1つは、認知バイアスによるリスクの過小評価である。本研究で各対象者から得られた抵抗方略は、約9字、2個程度で（Table 1）、多いとはいえない。これは危機的な状況を想定することで被る心理的ストレスを回避するための「楽観主義的バイアス」、「ベテラン・バイアス（既経験ゆえの過誤）」、「バージン・バイアス（未経験ゆえの過誤）」が抑制的に作用したからだとも考えられる。今後は、条件の統制、バイアスの影響も考慮した「構え」の測定、実際の反応、行動レベルの検討が必要となろう。

次に、本研究では、「脱出」方略が最も主要であり、先行研究で有効とされていた「救援要請」方略は、主要な「構え」となっていないことが示された。Gordon & Riger¹⁴⁾によると、自らを強く、速いと評価する女性は、犯罪不安が小さいという⁸⁾。本研究の対象者は女子学生で、身体能力は一生のうちでピーク前後にある。不審者を振り切って逃げる自信が多少はあるのだろう。「身体的抵抗」「怒りの表出」には、相手からの反撃、ヒートアップのリスクが生じる。ならば、走って逃げる「脱出」を最善の方略として想定しても不自然ではない。

また、他者に助けを求める「援助要請行動 (help-seeking behavior)」は容易に起こるものではなく、状況認知の影響を受け、自ら抑制してしまう場合もあるという。野崎・石井¹⁵⁾は大学生の援助要請行動を抑制要因に基づいて分類しているが、本研究が想定したような不審者に攻撃を受けるといった「緊急事態時」は、重大性が高く認知され、援助を求めることで要請者の自尊心が低下する脅威は小さい。しかし、援助提供者への「心理的負債感 (indebtedness: 何らかのかたちで返報しなければならないという義務のある状態)」が高くなることを見出している。本研究でいえば、助けてくれた人を犯罪事態に巻き込むことに負債感を覚えるのかもしれない。他者の加勢を得ることになれば、安全、労力の面で「貴重な資源」を求めることにもなる。独りで歩かないほうがよいとされる時間帯、場所であれば、自分が受けてきたアドバイスに従っていないという負い目は援助要請を躊躇させるだろう。これらの心理的負債感が「救援要請」の想定を抑制した可能性は十分にあり得る。泉田・高木¹⁶⁾で挙げられたように、援助者は「見ず知らずの人」であり、自分を救ってくれるだけの能力、意思があるのかはわからない。このような「援助者へのためらい」の影響も大きいだろう。

最後に、清永ら³⁾の調査では、事件に遭遇した小学生のうち2割が「何もできなかった」と答えていた。Bracha, Ralston, Matsukawa, Williams, & Bracha¹⁷⁾は、外敵からの攻撃に対する防御反応に関して、Cannon⁹⁾の“fight or flight”では不十分として、新たに“freeze (硬直)”と“fright (動転)”を加えるべきとしている。硬直、動転ともに避けたい事態である。当面の防犯教育では、「救援要請」の有効性認知、レディネスの形成が求められよう。そして、女子青年から収集した実例をもとに、抵抗方略および効力感の高低に影響する性格特性、社会的スキルなどの要因をボトムアップ的に検討する必要があるだろう。さらには、現代の本邦においても、小宮山ら⁵⁾やUllman & Knight⁷⁾が行ったような犯行記録、通報内容、法廷証言の分析から得られる情報を市民に知らせ、自らの「構

え」を評価、修正させることが効果的な防犯教育を可能にするものと考えられる。

引用文献

- 1) Honda, A. and Yamanoha, T.: Perceived risks and crime prevention strategies of Japanese high school and university students. *Crime Prevention and Community Safety*, 12, 77-90, 2010
- 2) 永井靖人：テキストマイニングによる女子学生の防犯行動の抽出，名古屋学芸大学短期大学部研究紀要，8，104-115，2011
- 3) 清永賢二，楊 奈穂，田中 賢：犯罪からの子どもの危機実態に関する研究：小学校を中心として，日本女子大学総合研究所紀要，13，1-74，2010
- 4) 田口真二，池田 稔，桐生正幸，平 伸二：性犯罪の行動科学：発生と再発の防止に向けた学際的アプローチ，北大路書房，2010
- 5) 小宮山 要，松本 巖，土井敏彦，齋藤勝次：単独強姦の犯行過程-1-攻撃場面を中心とした既遂，未遂要因比較，科学警察研究所報告，防犯少年編，11(1)，50-58，1970
- 6) Bartol, C.R. and Bartol, A.M.: *Criminal behavior: Psychosocial Approach* (7th ed.). NJ: Prentice Hall, 2005, 羽生和紀(監訳)，横井幸久，田口真二(編訳)，犯罪心理学：行動科学のアプローチ，北大路書房，2006
- 7) Ullman S.E. and Knight, R.A.: The Efficacy of Women's Resistance Strategies in Rape Situations, *Psychology of Women Quarterly*, 17, 23-38, 1993
- 8) Rosenbaum, D.P., Lurigio, A.J. and Davis, R.C.: *Prevention of Crime: Social and Situational Strategies*, Belmont, CA: West/Wadsworth, 1998
- 9) Cannon, W.B.: *Bodily Changes in Pain, Hunger, Fear and Rage: An Account of Recent Researches into the Function of Emotional Excitement*, NY: Appleton, 1915
- 10) 樋口耕一：KH Coder <http://khc.sourceforge.net/>
- 11) 松村真宏，三浦麻子：TTM: TinyTextMiner β version <http://mtmr.jp/ttm/>
- 12) 警視庁ホームページ：<http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/seian/bouhan/bouhan1.htm>
- 13) 松村真宏，三浦麻子：人文・社会学のためのテキストマイニング，誠信書房，2009
- 14) Gordon, M. and Riger, S.: *The Female Fear*, NY: Free Press, 1988
- 15) 野崎秀正，石井眞治：抑制要因に基づく大学生の援助要請行動の分類，広島大学大学院教育学研究科紀要：第一部・学習開発関連領域，53，49-54，2005
- 16) 島田 泉，高木 修：援助要請を抑制する要因の研究Ⅰ：状況認知要因と個人特性の効果について，社会心理学研究，10(1)，35-43，1994
- 17) Bracha, H.S., Ralston, T.C., Matsukawa, J.M., Williams, A.E. and Bracha, A.S.: Does "Fight or Flight" Need Updating? *Psychosomatics*, 45, 448-449, 2004